

世界凧博物館

東近江大凧の特徴

1 枚の大凧を作るには、平均して約 600 人の手が必要です。大きな問題なく進めば、製作には約 1 か月かかります。完成した大凧は長さ約 13 メートル、幅約 12 メートルにもなり、重さが 700 キログラムに達するものもあります。大凧には、約 360 枚の和紙、50 本の竹、約 20 リットルの糊が使われます。

東近江の住民たちは、自分たちが設計し、作り、揚げる大凧を誇りに思っています。大凧の製作は、長く続く友情を育み、地域社会を一つにする役割を果たしています。製作方法が世代から世代へと受け継がれてきた東近江大凧には 3 つの特徴があります。

判じもん

切り抜き

風の抵抗を減らすため、大凧の製作では「切り抜き」と呼ばれる技法が使われます。製作中に、和紙の特定部分に戦略的に穴を開けることで、凧の空力バランスを向上させ、絵柄に影響を与えることなく、安定した飛行を可能にします。

長巻き

「長巻き」と呼ばれる技法は、凧を簡単に運搬、移動、保管できるようにするためのものです。通常の凧の骨組みは竹を縦横に交差させて作られますが、東近江の大凧は縦方向の竹の棒が簡単に取り外せるように作られており、カーペットのように巻いて収納できます。運搬時には、水平に組まれた竹のはしごを使って約 20 人がかりでトラックまで凧を運びます。